

地域情報誌人気コーナー『笑いの文化人講座』 の単行本化とその資料価値

— 地方語文献としての可能性について —

島田 泰子

はじめに

日本語史研究と方言との関わりは常に論じられるところである^(注1)が、近年はまた小林(2004)が、方言研究の成果を持ち込んで日本語史の記述を見直すことを改めて提唱し、その理論と方法などについての全体像を示した。中央語史の再検討や方言史の構築を含む総合的な日本語史の描出にあたって、方言研究はますます重要性を増すと思われる。

ところで、香川県の方言は、圧倒的に顕著な個性を持つ他の方言(例えば東北や九州などにおける)に比べて、あえて言えば地味であり、研究上の扱いにおいても、アクセント研究^(注2)のように特に問題とされる事象への注目を除けば取り立てて大きな脚光を浴びるものではない。語彙論的な分野に関しても、上野(1984)、高橋(1977)など四国全域の(あるいは井上崇子(1966)(1967)、柴田・東川(1983)など中四国の瀬戸内海沿岸地域の)言語事象について概観的に捉える記述の一部としての扱いがやはり目立つのは、地理・交通上の条件もあって現実に共通・類似するものが多いためであろう。

しかしながら、関西圏から赴任した本稿の筆者のようなよそ者の目から見る香川方言語彙には、なかなか興味深い現象が多い。共時論的な観点からの論考・記述や調査報告としては、柴田(1989)(1993)、柴田・高橋(1989)、町(1976)などがあるが、通時的な視点、つまり日本語史を扱う立場から見ても、香川方言語彙には目を引くものが多い。近世の上方に一般的であった語形や用法が意外なかたちで日常的に用いられる事例も観察され^(注3)、近世上方語の残存という点からも注目される。また、特に語構成論や音韻上の問題に関連する語の形態面についても、語史・語彙史の研究に寄与すると見られる現象は多い^(注4)。香川方言の語彙は、日本語史研究上の価値に照らしても魅力あふれる「宝の山」であると言ってよく、これらの分野に関して記述を待つ現象はまだたくさん残されているように思われる。

本稿は、現代香川方言(いわゆるさぬき弁)の表現が多く含まれるまとまった地方語の資料として、『笑いの文化人講座』なる文献を取り上げるものである。書誌情報などを記して、その存在ならびに資料性を内外に紹介するとともに、その価値や可能性についても記述しておきたい。

1. 書誌情報・概要・発刊の経緯など

本節ではまず、その書誌について記し、概要や発刊の経緯などについて紹介しておく。

『笑いの文化人講座』は、香川県高松市の出版社「株式会社 ホットカプセル」が発行する地域情報誌『TJ Kagawa』に連載された読者からの投稿コーナーをまとめて単行本化し、連載時のコーナー名と同じタイトルの書籍として同社より出版されたものである。1987年3月に第1巻が世に出

されてから、多い時では年に2、3冊のペースで同誌の別冊として刊行され、最終巻にあたる2004年6月発行の第25巻まで、17年間の長きにわたって人気を博した。

各巻の奥付により発行年月等の情報を一覧すると、次の【表1】のようになる。各巻の体裁はいずれもB6判。当初(1~2巻)は200ページ弱であったが、4巻を数える頃から250ページを超える分量となり、巻ごとにばらつきはあるものの1巻あたりおよそ500~900点前後の投稿作品が、次節に述べるジャンルごとに整理され採録されている。

【表1】には、各巻に収録された投稿作品と、雑誌掲載時期との対照を示した。作品に反映された世相と単行本の発刊時期には最大で5、6年ほどの隔たりがあることになるが、ともあれ雑誌連載時を基準に見れば、この投稿企画は、実に21年にわたる蓄積を有することとなる。

【表1】単行本『笑いの文化人講座』各巻の書誌情報

巻	別冊情報	発行年月	収録作品 雑誌掲載時期
1	月刊タウン情報かがわ別冊	1987. 3	1982-83
2	月刊タウン情報かがわ別冊	1988. 9	1982-86
3	月刊タウン情報かがわ別冊	1991. 3	1986
4	月刊タウン情報かがわ別冊	1992. 4	1987
5	月刊タウン情報かがわ別冊	1993. 2	1988
6	月刊タウン情報かがわ別冊	1993.11	1989
7	月刊タウン情報かがわ別冊	1994. 5	1990
8	月刊タウン情報かがわ別冊	1994. 8	1991
9	月刊タウン情報かがわ別冊	1994.12	1992
10	月刊タウン情報かがわ別冊	1996. 7	1993
11	月刊タウン情報かがわ別冊	1996.12	1994
12	月刊タウン情報かがわ別冊	1997. 6	1994-95
13	TJかがわ別冊	1997.11	1993-95
14	TJ Kagawa別冊	1998. 5	1996
15	TJ Kagawa別冊	1998.11	1995-96
16	TJ Kagawa別冊	1999. 3	1997-98
17	TJ Kagawa別冊	1999. 9	1997-98
18	TJ Kagawa別冊	2000. 2	1998-99
19	TJ Kagawa別冊	2000. 8	1998-99
20	TJ Kagawa別冊	2001. 4	1999
21	TJ Kagawa別冊	2003. 2	2000-01
22	TJ Kagawa別冊	2003. 5	2000-01
23	TJ Kagawa別冊	2003. 8	2001-02
24	TJ Kagawa別冊	2003.12	2001-03
25	TJ Kagawa別冊	2004. 6	2001-03

雑誌『TJ Kagawa』は、1982年4月に『月刊タウン情報かがわ』として創刊された^(注5)。当初より設けられた投稿コーナーは、身近な出来事やふとした疑問・意外な発見をユーモアや皮肉・風刺を交えて報告したり、ちょっとしたダジャレや回文などのことば遊びを創作して書き送るものであるが、その内容の水準の高さ（いわゆる「笑い」のレベル）や、掲載時に編集部により添えられるコメントとの相乗効果による面白さなどもあって、地域住民に留まらず近隣各県にまでたちまちその名を知られることとなった。

内容の水準の高さは、掲載作品の選定作業に際しての編集部の基準とセンスの問題に起因するものと見られるが、同コーナーはまた、投稿作品と投稿者に対する独自の評価システムを整備しており、投稿者の意欲を刺激するさまざまな工夫が設けられていた点でも特筆すべきであろう。投稿作品は、その面白さから「優」「良」の二段階（まれに「秀逸」もあり）に評されるが、その成績はポイント制で投稿者ごとに積算され、ランキングや年間作品大賞の発表とあわせて、景品ステッカーや賞金などによる表彰も行われた。同誌の読者にとって、自らの投稿が採用されて同コーナーに掲載され、規定の条件を満たして「文化人」の認定を受けることはたいへんな榮譽であり、ハガキ・封書（後には電子メールも）による投稿は、ますます活況を呈した。

こういった循環的な盛り上がりの中、21年もの間毎月続いた同コーナーは、その面白さから継続して好評を博し、県内外に広く愛好者を獲得した。県外在住者が香川県出身者の紹介を通じてその存在を知り熱烈な愛読者となった事例や、県外からの旅行者が県内の書店で同誌を見かけてみやげ代わりに購入しそのまま定期購読者となった事例なども、少なからず存在するという。いずれにせよ、同誌ならびにその人気コーナーとしての「笑いの文化人講座」は、早い段階から知る人ぞ知る通人のたしなみとして静かに広まり、一地方の地域情報誌における投稿コーナーとしては、存在じたいが異色とも言えるものであったと言っても過言ではなからう。

内容・人気もさることながら、同コーナーはまた、量的な面においても圧巻であった。毎月発行される150～200ページほどのA4判の雑誌のうち、毎号10～15ページに及ぶ紙幅がこの投稿コーナーに当てられ、多い時で300点もの投稿作品が掲載された。この点においても「笑いの文化人講座」は、類似の他誌における同様の企画（同誌のエピゴーネンも含まれよう）に比して、圧倒的に群を抜く存在と言える。こういった特異な状況の中、その単行本化も実現したのであった。その間の経緯については、第2巻の巻頭に掲載された「前号までのあらすじ」に詳しい^(注6)。

なお、当初同誌の編集長をつとめた田尾和俊氏^(注7)は、後にホットカプセル社の専務を経て社長となり、2002年3月に退職して同社をあとにした^(注8)。投稿コーナー「笑いの文化人講座」の創設者であり選考者であった同氏が編集スタッフからはずれ、また誌面の刷新などもあって、本誌における同コーナーは2003年4月号を最終回とし^(注9)、あわせて単行本の発行も、25巻目をもって一応の終了を迎えた^(注10)。ここに、『笑いの文化人講座』全25巻は、まとまった資料として量的にも質的にも完結を見ることとなる。

2. 内容・構成・特色など

次に、その内容について、さらにいささかの補足的な解説を加えつつ記述しておきたい。

雑誌連載段階から、採用された投稿作品は全ていくつかのジャンルに収められ、単行本化にあっても、そのジャンル分けは適用された。連載が続いた21年の間に、ジャンルにも多少の不易流行が見られるが、継続した主なものをいま内容の方向性などからおおまかに分類して示すと、おおよそ以下のようなになる（項目の系列名は、本稿の筆者による便宜上のもの。カッコ内の解説も同じ）。

〈ことば遊び系〉

- ・冒頭の辞（人口に膾炙した警句や歌詞などのパロディ、ダジャレなど。投稿コーナーの冒頭に配置）
- ・熱血回文（回文作品）

〈路上観察学系〉

- ・お笑いプリントギャラリー（広告や看板の表記、商品名など、身の回りで見つけた“ヘンなもの”報告^(注11)）

〈考察・突っ込み系〉

- ・テレビ・マンガにほえろ！（TVやマンガの内容についてのコメント、矛盾の指摘など）
- ・考察の館（どうでもよさそうなこと・あまりに身近で気付かれにくいことに関する、大まじめな考察、盲点をつく意外な指摘、珍妙な解釈、大胆な提案など。「〇〇の法則」「私の疑問」「指摘の鬼」などの下位分類を広く包含する、コーナーきっての一大ジャンル）

〈事件・出来事系〉

- ・カン違い（投稿者自身やその周辺による、大いなる「勘違い」を報告し競い合うもの）
- ・なんやねん（だからなんやねんと言われそうな些事ながら、看過できず報告される、身近な出来事。あるいは、なんやねんそれはと呆れられそうな間抜けな事件など。上記「考察の館」と並び作品の大半を占める。内容としては、〈事件・出来事系〉の他に、下記の〈人間観察系〉に該当するものもあり）

〈人間観察系〉（身近に存在する・または世にありがちな、人間の言動についての指摘）

- ・悲惨なやつ
- ・ダサイやつ
- ・イヤなやつ
- ・世間のハジ

この他、時期によって、〈事件・出来事系〉に該当する長文の「特別レポート」、〈人間観察系〉に該当する「田舎合戦」、およそあり得ない作り話を事実めかしてそれらしく報告する「ウソをつけ」などのジャンルもある。

単行本において、これらのジャンルごとに再構成された作品は、一作品ずつ投稿者の居住地とペンネームを添えて並べられ^(注12)、編集部のコメントが付く^(注13)。香川方言を交えた地域色の強い作品群は、ほとんどが口語性の高いカジュアルな文体・俗語的な表現で綴られる。特に、実際の出来事などを報告するものには、会話・発話などの描写が多く含まれ、方言の出現率も高い。編集長とスタッフとの会話の体裁を取る編集部のコメントもまた同様である。

ローカルな市町名が並び文中に方言パワーが炸裂するこの地域色のインパクトが、県下の読者はもちろんのこと、県外の読者にまで期せずして好評であったらしい。反響を受けてか、同書では、初期のものよりも、むしろ後になるほど、方言による表現をことさらに楽しみつつ積極的にアピールする傾向が強くなっていく。以下に、その具体例の一端を示してみる。

（以下の挙例は、作品本文、投稿者の表示、編集部によるコメントまでが原文。さらに出典として、単行本掲載時の巻数・ページ数とともに、〔 〕内にジャンル名を示しておく。文中の太字ならびに下線は引用者による。なお、一部の挙例を除いては、本稿における引用の意図を焦点化するため、編集部によるコメントを割愛した。）

- (1) 東京方面の悪徳商法らしき業者からひつこくかかってくる勧誘の電話に、先輩が相手に意味がわからないようにやさしいゆっくりとした口調で「そなほっこげにゆうたってじょんならんじゃろげ。ひつこげにぬかっしょつたらおがっしゃげるぞ」と言って断りました。 (坂出市 50円切手で隠して)

11巻 p. 127 [なんやねん]

- (2) この前、家のトイレの40ワットの電球を100ワットに変えた時、トイレに入ったばーちゃんが「うわっ、あかいの～。何か恥ずかしが～」と言った。 (丸亀市 近所のおばちゃん)

14巻 p. 87 [なんやねん]

『笑いの文化人講座』第1巻の巻頭には、次のような解説が見られる。単行本発刊当初より県外の読者の存在を自覚的に意識していたことが知られる記述である。

本書は昭和57年というから5年も前に創刊されていまだに発行され続けている香川県のタウン誌「月刊タウン情報かがわ」の人気ページ、「笑いの文化人講座」の単行本である。「香川県のタウン誌」というあたりに全国を意識した表現が見られるが、そういう魂胆もある。

これに続く「読者心得」なる注意書きの第2条によれば、投稿作品中に香川方言が頻出することが同書のアイデンティティとして当初から位置づけられていたこともまた窺われよう。全7条からなる「読者心得」は、第2巻以降も原則として同文のまま若干の修正を伴って毎巻の巻頭に置かれることになるが、方言に関する第2条は、コメントの様式が変更になった第3巻以降、次のような文言でほぼ定着し、第25巻まで続くこととなる。

二、本巻掲載の作品群は本来香川県内で読まれることを想定したものであるため、讃岐弁による表現が随所に見られるが、他県読者は雰囲気を読むように。特に難解なものについては、ご近所の香川県人におたずね下さい。

実際に、投稿作品の中には、老年層の言葉づかいに見られる伝統的な方言について、若年層世代の立場から驚きをもって報告・描写するものもあり、編集部のコメント^(注14)にも、そういった作品の価値について自認するところがあったと見受けられるものが多く拾われる。

- (3) 某ロックバンド(日本)のライブビデオを見よつたら、横で寝ていたばあちゃんが「何ぞ、そのいがつりゃいは。よそ(外国)のなんぞか?」て言うた。 (白鳥町 短パンな)

㊥ なんか、学術的な方言の本にない方言がかなり存在しているみたいだ。

㊦ ほんで大体、そっちの方がおもしろいんですよ。

22巻 p. 124 [なんやねん]

- (4) 高松のアプライドでプリンター販売応援のアルバイトをしていて、お客様に「このインクは水性ですから、水に濡れますと…」と説明したら「じゅじゅむんやな?」と言われて腰が抜けそうになった。

(尼崎市 なりりん)

㊥ 讃岐の標準語やからな。

㊦ それ標準語ちゃいますやん。

22巻 p. 145 [なんやねん]

メディアにおける方言の扱いやそれに対する反響など^(注15)を見ても、方言エンタメ時代^(注16)の隆

盛が実感される昨今であるが、同書を見るに、香川県においては、雑誌に連載の開始した1980年代初頭から、若者世代を中心としてその気運の高まりが始まっていたと言える。仮にこれが「笑いの文化人講座」の愛好者に限られる現象であったにしても、帰属意識と連帯感を確認する、今日的な「集団語」的位相を獲得しての方言尊重^(注17)が見られる点で、同書における「讃岐弁」の扱いはやはり注目に値することであり、社会言語学的にも興味深い事例として報告できよう。同書はいわゆるサブカルチャー的な性格を持つものであるが、地方語文献としての側面に着眼してその資料価値を指摘しようとする本稿の趣旨は、上記のような事実に基づくものである。

3. 資料価値と可能性

上に記したとおり『笑いの文化人講座』全25巻は、香川方言による表現が頻出する地方語文献としての側面を持つ。その特性と資料価値を改めて整理すると、以下のようになるろう。

(資料の形式に関して)

- ① 文字資料である
- ② 公刊された書籍である

(資料の内容・性格に関して)

- ③ データ量が豊富である
- ④ 口語性が高い
- ⑤ 文脈付き用例集としての性格を持つ
- ⑥ メタ言語的言及がしばしば見られる
- ⑦ 完結した資料としてのまとまりを持つ

これらについて以下、いささかの補いを加えておきたい。

① 文字資料である

方言が記録されたものには、会話などの録音資料やそれを文字に書きおこしたものから、方言による民話やシナリオ、あるいは方言語彙を集めた方言集など、さまざまなものがあるとされる^(注18)。同書は、録音資料の書き起こしではないものの、前節に述べたような内容や性格から、それに準ずる位置づけが可能であろう(口頭で行われる自然な発話に近い方言が文字で記録されたもの)。

なお、共通語と同じく5つの母音による標準的な音韻体系を持つ香川方言は、子音の調音などにおいても特異な現象を持たず、アクセントやイントネーションなどプロソディックな部分を除き^(注19)、文字で表記されたものと発話される現実の音声との間にさほどの乖離はない。よって、例えば『ケセン語大辞典』^(注20)などでの「ケセン式ローマ字」や『秋田のことば』^(注21)などでの「秋田弁の五十音図」に見られるような、表記上のルールを独自に定める工夫は、特に要求されない。その点で、文字資料としての同書に見える方言語形について、扱いの困難は特に伴わない。

② 公刊された書籍である

同書は、油印版・私家版の類ではなく、ISBN(ただし一部の巻についてはISBNを欠きNBNのみ)を付して出版社から公刊され市場に流通する一般の図書である。現在、初期のものを中心として、完売などにより入手困難な巻も出始めているが、香川県立図書館には郷土資料として全巻2部ずつを完備し(うち1部は貸し出しも可)、また、国立国会図書館の蔵書にも収められている(ただし8~12巻を欠く)。その点において同書は、保存性とavailability(参照の便宜)に優れていると言える。

- ③ データ量が豊富である
- ④ 口語性が高い
- ⑤ 文脈付き用例集としての性格を持つ

全25巻というまとまった分量を持つデータは、例えばある語の用法を知るために具体的な使用例を複数得るなどの場合に、たいへん有効である。前節に述べたように、同書では「讃岐弁」が生き活きと描かれた部分が多く、極めて口語性の高い、実際的な用法が知られる場合が多い。単なる語彙項目（見出し語）の羅列もしくはそれにごく簡単な語釈（まれに短い例文）が付せられただけのものに終わりがちな方言語彙集や方言辞典の類とも異なり、同書は、図らずも文脈付き用例集のような性格を持つものとなっている。

しばしば指摘されるように、方言調査において行われる「質問票による調査法」は、既知の言語現象について確認しさらに詳細なデータを採取するのには向いているものの、未知の言語現象を発見・発掘するには適さない。一方、「自然観察（参与観察）法」は、時間的コストなども含めて、個人研究においてはささか効率が悪く負担が大きい、というデメリットを有する^(注22)。同書に見える方言の使用例は、自然談話データを採取したものに近く、語彙・文法に関して、語の運用の実態が多角的に看取されやすい。

例えば、沖（1992）、篠崎（1998）などいわゆる「気付かない（気づかれにくい）方言」の類が多く観察されることも、同書の資料性のひとつとして指摘できよう。一例として動詞が共通語的な意味範囲と異なる用いられ方をした例を2、3示せば、次のごとくである。

- (5) カップ焼きそばで湯きりをしていて全部まくやつ。
（郷東町 じゅんちゃん）
15巻 p. 154 [ダサイやつ]
- (6) 突然彼から「アイシテルトイッテクレ」とベルが入ったけん「も一朝から何よー」と思いつつ「アイシテル♡」ってベルはめたが、よくみると「アンテイショイッテクル」だった。
（坂出市 とまとまと）
18巻 p. 145 [カン違い]
- (7) たかがコンビニに来ただけなのに、タイヤがのくんでないかというくらいの急ハンドルで入ってくるヤンキー。
（豊中町 なるめろん）
19巻 p. 239 [ダサイやつ]

意図的な動作（「水をまく」「まき散らす」など）ではなく、「うっかりこぼす」の意に用いる他動詞「まく」やその関連表現は、香川方言に限らず徳島県（自動詞形「まける」を「こぼれる」の意に用いる）においても見られるようであるが^(注23)、県内在住の当事者の多くは、これを方言として認識していない。他動詞「はめる」の意味領域は共通語の場合よりかなり広く、「仲間に加える」「財布にメモを入れる」「レジで商品を袋に詰める」などの下線部を全て「はめる」が担う。自動詞「のく」についても同様で、香川方言では「汚れが落ちる」「服のボタンが取れる」「化粧が剥がれる」などの下線部の代わりに、全て「のく」が用いられる。「はめる」「のく」については、本稿の筆者が授業などで言及したことを受けて、ゼミ生が卒業論文で題材として取り上げたことがある^(注24)が、こういった用法の違いを面白がったり気に掛けたりするのは、やはり県外から香川大学に進学した学生たちであった^(注25)。こういった事例に関して、当事者（方言の使用者）が必ずしも自覚的に認知していない用法の厳密な実態をうかがい知るのに、同書は一定の有効性を持つと言えよう。現に、例えばこれらの3語について、同書中には興味深い用例が多数得られる。

⑥ メタ言語的言及がしばしば見られる

前節で触れたとおり、同書は香川方言による表現が頻出することをそのアイデンティティのひとつとして捉えており、投稿作品本文ならびに編集部コメントには、方言に関するメタ言語的な言及がしばしば見受けられる。例えば次の(8)(9)は方言の使用が県外の人間に通用しなかったことへの言及、(10)は使用する世代などについての情報ならびに意味用法の解説としてそれぞれ興味深く、いずれも何らかの手がかりとして参照され得るものであろう。こういった記述を多く含むこともまた同書の資料性のひとつに挙げることが出来る。

(8) R命館大学に行ったうちの知り合いのお姉ちゃんは根っからの香川県民だが、この前大学の友達と六甲まで旅行に行った時、あまりの景色の美しさに感動して「うわ～、けっこ～！」と叫んだら、「お前はニワトリか」と皆の笑いもんになったそうだ。
(東京恥検特奏部/後輩NAKO)

15巻 p. 131【悲惨なやつ】

(9) 私は香川県人ではないので讃岐弁がわかりませんが、昨日タクシーに乗ったら運転手が「こんなに雨降ってワヤになる」と言いました。「雨降って、地、固まる」でしょう？
(木太町 のんの)

18巻 p. 147【カン違い】

(10) バイトでレジに入っていた時、めちゃめちゃ女子高一生ー！みたいな子が1万円出して「これめーで(両替しての意)」「え?」「1万円めーで」。今どき年寄りでもあまり使わんよーな方言使われて、一瞬頭が真っ白になった。
(うしろのトトロ)

㊦ ばあちゃんっ子だ。95%間違いない。

㊧ 残りの5%は消費税ですけど、こんなん僕らでも言いませんよ。

㊨ 「めーで」は「めいで」、「めぐ(こわす)、めいだ(こわした)、めいで(こわして)」だ。

I井さんが東京で言うた「このカメラ、めげちゃってね」だ。

㊩ 県外人、こんがらがって頭めげます。

21巻 p. 163【なんやねん】

ちなみに、(8)の「けっこい」は漢語「結構」を形容詞化したものであるが、漢語系の形容動詞語幹を形容詞として用いる事例は、「ごつい(雑)」「たいぎい(大儀)」をはじめとして香川県に広く見られる^(注26)。(9)の「わや」は、「わやくちゃ」などの複合語形を含め近世期に上方で多用されたが、今日の関西方言ではやや抽象化した意味に転じ、事柄レベルで「ダメになる」意にしか用いない(「もうかりまっか」「さっぱりワヤですわ」など)。これに対し香川方言においては、今日なお、即物的な散乱や器物の故障などを含め、広い意味で日常的に用いられる。(10)の「めぐ・めげる」については、NHK高松放送局(1991)に言及がある^(注27)が、共通語的に用いられる「めげずに頑張る」など、精神的な落胆を意味する俗語的な用法との関連において注目されるものである。

⑦ 完結した資料としてのまとまりを持つ

雑誌での連載も終了し、単行本としても25巻を最終巻として完結した同書は、いわば「閉じた」資料としてのまとまりを持つ。例えば、用例を量的な面で検討しようとする場合、『笑いの文化人講座』全25巻における使用例を用法別に分類し、用例数の割合について分析する、などといった利用法が可能になるのは、「閉じた」資料ならではのであろう。もちろん、同書は香川方言の実態を網羅的に収めるものではないが、その分量の多さとあいまって、一定の範囲内での言語の実態を観察するのに有効な面を備えると言うことは出来よう。

4. 見通しと問題点・留意点など

以上に述べたような資料性を有する『笑いの文化人講座』の活用について、最後にまとめを兼ねて、その見通しと問題点・留意点などを記しておきたい。

自然談話データの記録に近く、文脈付き用例集としての性格を持つ同書を、方言研究の資料として用いるにあたっては、注目すべき言語事象の発見に役立てたり、語の運用の実態を知る手がかりとするなどの活用の方法が見込まれる。用例の出典としての利用も考えられよう。また、全文の電算化・タグ付け（品詞情報など）によるコーパス化も考えられる。ただし、『笑いの文化人講座』は販売される出版物（商品）であり、著作権などの問題もあって、（複製が容易な）電子形態での全文公開には、問題が伴われる^(注28)。

なお、同書は雑誌投稿コーナーの単行本化であるため、作品投稿者のプロフィールについては、（一部の常連投稿者などを除いて）追跡・確認が不可能である。居住地の市町名表示が県下のものになっていれば、東讃・中讃・西讃などといった方言区画上の地域的属性が情報として得られるものの、県外からの投稿については、香川県出身者かどうか判然としない場合も含まれる。また、投稿作品の内容（通学先の学校での日常を描いたものなども多い）から、若者世代が圧倒的多数であることが知られるものの、個々の投稿者の正確な年齢や、性別（ペンネームの場合）なども明らかではない。つまり、通常の方言調査におけるインフォーマントの情報に該当する、方言使用者の正確な属性については、同書からは得られがたい。一般の方言調査に対する代替的なものでは決してなく、あくまで補助的な資料と位置づけ、適正な利用に留意することが必要であろうと考えられる。

おわりに

小林（2004）は、日本語史研究の方法を次の二つに求められるとする。

- 1、（過去の）文献を資料とする「文献学的方法」
- 2、（口頭で行われる）現代方言を資料とする「方言学的方法」

2には、いわゆる比較方言学や方言地理学が含まれるが、一般の日本語史研究において従来取られる1の方法を、補完しかつ検証するものとされる。中央語史にのみ偏りがちであった従来の「日本語史」研究を、地方語史研究によって、全国語史としての地理的な広がりを持つ総合的な「日本語史」研究へと発展させるために、方言史の構築が重要となる。そのための資料という意味で「地方語文献」という術語は用いられ、通常、近世以前の歴史的資料を指す。

本稿では、現代方言の文字資料である同書を、あえて「地方語文献」と呼んで扱った。現代方言の研究は、いわゆる方言調査にのみその方法が求められるとも限らない。多くの方言がそうであるように日々刻々と変容を遂げつつ大局的には消滅の方向にある伝統的な香川方言が、ある程度まとまったかたちで含まれる資料として、同書には相応の価値が見出されてよいだろう。雑誌への連載開始から数えればすでに20年以上が経過する資料であるが、今後50年・100年と経過してゆくにつれて、同書もまた歴史的な資料としてその価値を増すことと思われる。ここにその書誌的な覚え書きを兼ねて資料性を明らかにしておくのも、あながち無意味なことでもあるまい。

同書を利用した具体的な論考については、注3に予告した別稿を始め、今後順次記述を試みたい。

なお、『笑いの文化人講座』は、本稿が提唱した地方語文献としての価値以外にも、さまざまな資料性を備えると見られる。特に、教育の現場で活用できる教材としての側面が注目されるが、それについての言及もまた、他日を期したい^(注29)。

- (注1) 先行研究や、「方言国語史」「方言日本語史」「文献方言史」「文献方言学」などの術語ならびにその定義については、彦坂(2000)や安部(2000)に詳しい。
- (注2) 島嶼部も含めた香川県の方言アクセントについては、金田一春彦、秋永一枝、上野善道、和田実、山口幸洋、中井幸比古、佐藤栄作各氏を代表として、膨大な調査・分析に基づく体系的な記述や考察がある。
- (注3) 例えば、自動詞として用いられる「立てる」や、副詞的に用いられる「いかさま」の語など。前者については柴田真希(2002)を参照。後者については別稿において記述の予定(『イカサマ考』『叙説』33、2006.3 発行予定)。
- (注4) 一例として、連体詞「こんな」の前身にあたると見られる「こなな」など。島田(2005)の注15において、「こんな」の語は「このやうな」に由来するとし、その語形の変化を、①「このやうな」→②「こないな」→③「こな一な」→④「こなな」→⑤「こんな」のように推定した。①から②へは「みたやうな」→「みたいな」の変化に類するもの、③から④へは香川方言にしばしば見られる短呼形への移行、④から⑤へは撥音化による語形変化として、それぞれ説明され得る。
- (注5) 後に『TJかがわ』を経て、1998年より『TJ Kagawa』と改題。
- (注6) なお、同誌創刊・同コーナー創設前後の様子や企画成功の背景・苦労話などといった実情を、その後の発展的な活動への展開も含めて当事者の立場から回顧した記述として、田尾(2004)が参照される(第2章 異色のタウン情報誌 第2節 「笑いの文化人講座」)。
- (注7) 田尾氏は、『笑いの文化人講座』以外でも広く県下の文化振興に寄与、特に讃岐うどんブームの仕掛け人として広く知られる人である。その功績を認められ、1999年に高松市から「文化奨励賞」、2003年に香川県から「かがわ21世紀大賞」を受賞している。
- (注8) 翌4月に四国学院大学社会学部に着任、カルチュラルマネジメント学科で教授をつとめ現在に至る。
- (注9) 後にweb上における同誌編集部の公式サイトにおいて復活したが、雑誌の連載ならびに単行本とは別個の存在として、本稿では扱いを区別したい。
- (注10) これまでの作品をテーマごとに再編集したりミックス版も企画され、その第一弾として『笑いの文化人講座 Remix① お笑い!学校の事件簿』が2001年8月に刊行されている。
- (注11) 宝島社の雑誌『月刊宝島』における類似のコーナーとその単行本化『VOW』シリーズが全国的に有名であるが、事実関係としては、「笑いの文化人講座」のほうがこれに先行する。(『VOW』の単行本第2巻所収「改訂版 VOWの歴史」によれば、『月刊宝島』の前身にあたる雑誌の創刊は1973年であるが、当初情報コラム記事としての位置付けにあった「VOW」コーナーが、市民情報欄というコンセプトを経て、読者からの投稿に重点を移し投稿専門ページを設けたのが1982年6月、さらに「創刊以来続いていた情報欄としての機能を投げうって、投稿+コラムのページとして独立」するのは1985年のことである。なお、単行本『VOW』の第1弾は、1987年10月の刊行)
- (注12) 通常「××町 ペンネーム」のように示されるが、複数の投稿者で構成されるグループ(「文化人集団」と呼ばれる)のメンバーによる投稿は、「○○○(団体名) / ペンネーム」のように表示される。
- (注13) コメントは、3・7巻のように全く付けられていないものもあるが、5巻までは脚注形式、10巻から編集スタッフによる対話形式となってほぼ全ての作品に付されるようになり、以後この様式が定着。
- (注14) (3)(4)におけるコメント行頭の○付きの一文字は、編集部スタッフの頭文字で、特に「⊕」は田尾氏を指す。(その風貌などから、編集長時代には「編集牛」、専務時代には「専牛」、社長時代には「社牛」の愛称で、スタッフや読者から親しまれた。)後出の(10)も同じ。
- (注15) 例えば、熊本出身のヒロシ・栃木出身の漫才コンビ「U字工事」・茨城出身の佐久間一行(以上お笑い芸人)・同じく茨城出身のアイドル磯山さやかなどといった方言の全面的な使用を売り物とする芸能人の活躍、また、テレビ朝日系・マッシュ-TV「なまり亭」のコーナーやそのスペシャル番組(2004.6.30 O.A.)といった、バラエティ番組における方言対決コーナーの人気など。

- (注16) エンタメは、エンターテインメントの略語。井上史雄(1993)が「娯楽としての方言」と呼ぶものを、より卑俗な表現を用いて若者ふうには、「エンタメとしての方言」となる。
- (注17) 小林(1998)を参照。
- (注18) 小林・篠崎(2003)を参照。
- (注19) 拍内下降のアクセントや、下降調で発せられる疑問文など、香川方言には音調面での特徴もいくつか見られるが、それらに関して文字表記への反映を期待することは、今しないものとする。
- (注20) 岩手県南部気仙地方のことば「ケセン語」の辞典。山浦玄嗣編、無明舎出版(2000年7月)。
- (注21) 秋田県教育委員会編、無明舎出版(2000年10月)。
- (注22) 『現代の質問調査法 アンケートことば学』(『日本語学』23-8)、木部(1998)などを参照。
- (注23) 「まけまけいっぱい」(器に液体をなみなみと注ぐこと)など。
- (注24) 川上(2003)、味野(2004)。
- (注25) なお、「はめる」「のける」の用法については、中井(1993)にも触れられており、特に県東端に位置する引田町での調査結果に関する報告がある。
- (注26) 柳田(1985)には、さらにキュークツイ(窮屈)・シンドイ(辛労)・リコイ(利口)などの語が挙げられており(シンキイの項)、愛媛県方言においても同様に多くの例が見られることが知られる。ザツイ・シンドイなどは、関西方言においても一般的。「めんどい」もこれらに準ずるものであるが、語源不詳で「面倒」の表記もいわゆる当て字とされるから、厳密には扱いを分けるべきか。
- (注27) ラジオ番組の内容を収録した(研究論文ではない)一般向けのものであるが、香川方言の語彙・表現などについて、土屋信一・柴田昭二両氏による学術面からの考察が行われている。
- (注28) 同書掲載作品の面白さと県外における知名度の低さ(一部の愛好家以外にはほとんど知られていない)とのギャップから、出典を明示しないかたちでの内容の流出がすでに至る所で見られ、一部で話題(問題)となっている。例えば、学校ネタの「○○の語を使って短文を作れ」シリーズは、インターネット上の掲示板「2ちゃんねる」に転載されて流布し、アスキーアートとともにフラッシュアニメに仕立てられてネット上に流通している。また、TVメディアにおける無断転用に関しては、田尾(2004)に一部触れられてあるが、最近ではまた、剽窃癖のある若手お笑い芸人がゴールデンタイムの番組「エンタの神様」(日本テレビ系)で立て続けに同書の作品をそのまま借用し、ネット上(ブログなど)で物議を醸している。コーパス化された本文の公開は、ともすればこれらの動きに加担しかねず、その点でも問題がある。なお、ホットカプセル社によれば、雑誌掲載段階で、作品の著作権は同社に帰属することになるとのことである。
- (注29) 「単行本『笑いの文化人講座』全25巻の資料価値 —教材としての応用と活用について—」(『香川大学教育研究』第3号に掲載の予定)

参考文献

- 安部 清哉(2000) 日本語史研究の一視点 —方言国語史の視点から— (『国語論究8 国語史の新視点』)
- 井上 崇子(1966) 岡山県玉野市沿岸部・香川県高松市沿岸部・その海辺の島々における方言事象の分布状況について (『生活語研究』1)
- (1967) 岡山県玉野市・香川県高松市・その海辺の島々における方言事象の分布状況について (『生活語研究』2)
- 井上 史雄(1993) 価値の高い方言/低い方言 (『月刊言語』22-9)
- 上野 智子(1984) 阿波方言「ウチヤ ミニヤ イタコト ナイ」の「ヤ」について (『方言研究年報』27)
- 沖 裕子(1992) 気づかれにくい方言 (『月刊言語』21-11)
- 川上 直樹(2003) 香川方言における他動詞「はめる」の研究 (平成14年度 香川大学卒業論文)

- 木部 暢子 (1998) 方言の調査 (『日本語学』17-9)
- 小林 隆 (1998) 現代方言の特質 (『方言の現在』明治書院)
- (2004) 『方言学的日本語史の方法』 (ひつじ書房)
- 小林 隆・篠崎晃一 (2003) 方言と方言学の世界 (『ガイドブック方言研究』ひつじ書房)
- 迫野 虔徳 (1998) 『文献方言史研究』 (清文道)
- 篠崎 晃一 (1998) 気付かない方言と新しい地域差 (『方言の現在』明治書院)
- 柴田 昭二 (1982) 香川方言のアスペクトについて (『香川大学一般教育研究』22)
- (1989) 香川県小豆島方言の語彙 (『香川大学国文研究』14)
- (1993) 香川方言のニルとタク (『香川大学国文研究』18)
- 柴田昭二・東川栄子 (1983) 備讃瀬戸漁村語彙稿(1)~(3) (『香川大学教育学部研究報告 第1部』57~59)
- 柴田昭二・高橋恵子 (1989) 「幼児語」の分類とその量的考察 —香川県における— (『香川大学教育学部研究報告 第1部』77)
- 柴田 真希 (2002) 自動詞「たてる」について (『香川大学国文研究』27)
- 島田 泰子 (2005) 連用における例示と程度 —コンナニ類の程度副詞化— (『日本近代語研究』4 ひつじ書房)
- 田尾 和俊 (2004) 『超麺通団② 団長の事件簿 「うどんの人」の巻』 (西日本出版社)
- 高橋 顕志 (1977) 四国諸方言における支持動詞カクについて (『都大論究』14)
- 中井幸比古 (1993) 今方言に起こっている変化について —香川県引田町の調査から— (『香川の民俗』56)
- 彦坂 佳宣 (2000) 方言国語史の研究法 (『日本語学』19-11)
- 日高貢一郎 (1998) 方言の有効活用 (『方言の現在』明治書院)
- 町 博光 (1976) 香川県小豆郡土庄町肥土山方言の副詞語彙について (内海文化研究紀要4 「瀬戸内海
域方言の副詞語彙の研究」)
- 味野由紀子 (2004) 香川方言における「のく」「のける」について (平成15年度 香川大学卒業論文)
- 柳田 征司 (1985) 愛媛県方言語詞抄 (『愛媛県百科大事典』上 愛媛新聞社)
- NHK高松放送局編 (1991) 『さぬきのことば』3 (美巧社)

(平成17年7月13日受理)

【初校時付記】本稿は、上記の日付をもって受理された。文中の社名表示などは、5月末日現在のものに基づく。脱稿後得られた情報によると、ホットカプセルは6月1日付けをもって株式会社「あわわ」(徳島県の地元出版社)と経営統合し、以後は「あわわ」内の「TJ Kagawa 事業部」として同誌の発行業務を継続していくとのことである。なお、『笑いの文化人講座』を研究・教育に活用するに当たっては、田尾和俊氏ならびに西俊朗ホットカプセル社長(当時)に、趣旨と概要等について説明の上、承諾を得た。また田尾氏には、事実関係の確認等に際し便宜をお図りいただいた。記して謝意を表したい。